

ハルハ・トウメンとその成立について

森川哲雄

(一) はじめに

中期モンゴル、すなわちいわゆる明代モンゴルにおけるトウメン tümen(万戸) がこの時代のモンゴル社会における重要な構成要素の一つであったことは言うまでもない。そしてその制度としては、直接には元朝時代につながるものであったということも周知の通りである。しかしながらこのことは元朝時代に存在したトウメンと中期社会に存在したトウメンが、全く同じ集団で、直接的につながるということも意味するものではない。事実、中期社会に存在したとされるトウメンの名称と前代におけるいろいろな集団の名称を比較してみてもその間に共通するものは非常に僅かである。同じ様にトウメンとは呼ばれても、その性格はかなり異っているものであって、その一側面についてはすでに述べたことがある。⁽¹⁾

このことは当然ながら、中期社会に現れたいわゆるトウメンが、元朝のトウメンの崩壊の後、様々な政治的変動

を経て、全く別な形をもつて編成せられたものである」とを推定させる。この時代のトウメンは単にこの時代のみにとどまらず、そのいくつかは清代における行政区画の直接的淵源にもなっており、従つて中期のトウメンがいかなる過程を経ていかなる事情のもとに成立したかを知ることは、この時代のモンゴル社会を解明する上で最も重要な課題である。しかしながらいさした面からの研究は史料不足等のいろいろな事情から今まで殆んどなされていない。

こゝでハルハ・トウメンの問題をとりあげたのは、これらの空白を埋めることを目的としたものである。本来ならば中期のトウメンをすべて取りあげ、全面的な検討を加えるべきであろうが、それは他日に期し、こゝではハルハ・トウメンの形成について若干の推察を試み、併せてそれに附隨する問題を検討したい。

（1）ハルハ・トウメンに関する諸見解

ハルハ Qalq-a といえば普通今のモンゴル人民共和国のほぼ全域を指すが、明代の中頃においてはそうではなかつた。すなわち當時のハルハは、モンゴリア東部のハルハ河を中心にして遊牧する集団であつたらしく。

当時のモンゴリア北部の大部分は依然としてオイラート Oyirad の勢力範囲にあつた。ハルハがその領域を拡大したのは明・嘉靖三十一年のアルタン・ハーン Altan qaran のオイラートに対する征討の結果であつたといわれる。⁽³⁾

といふで、部族集団としてのハルハは史料的にいつ頃から現われるであろうか。和田清氏はこのハルハ集団の淵源について、明史錄、正統三年四月癸酉（二十一日）の条に記される、「朵顏衛所屬哈刺孩衛指揮撫可來等……來朝

ハルハ・トウメンとその成立について 篠川

貢馬」とある中の哈刺孩衛が後のハルハの源であり、それは今のハルハ河の名から出たものであると述べられていて⁽⁴⁾。ヘルハ・トウメンの名がハルハ河の名から出たところとはまず間違いないといふのである。⁽⁵⁾ しかしながら和田氏も指摘されているように哈刺孩衛入貢のことは同実錄正統元年十一月戊寅（十七日）の条にも記されており、それに

哈刺孩等衛女直指揮吉列兒等、驅罕河衛女直指揮脫因、托兀者前等衛女直指揮阿刺秃等各來朝貢鷹馬云云
とありこの記事によれば哈刺孩衛とはモンゴル族の集団ではなくて、実は女直に所属するものとしらう」とになる。哈刺孩衛が女直であったとすれば、「朵顏衛所属」としらうとは決して無理なことではない。哈刺孩の音がハルハに近いことは認められるが、やはりこの哈刺孩衛とは「」で検討しようとしているハルハ集団とは全く関係がないものと言わねばならない。⁽⁶⁾ 漢文史料による限り、魏煥の皇明九邊考、卷四、宣府鎮の辺夷考に記された「罕哈部」が、殆どハルハの初見であるとみてよ。

同様に蒙古年代記においても具体的な事件の中に部族集団としてのハルハの名が現われるのはそれ程早い例では無い。蒙古源流 Erdeni-yin Tobči やび、ダヤン・バー Dayan qaran の右翼部討征と関連して

十一・ムカシ・Arban qoyar Tümed ムナク・ヘルハ Arban qoyar otor Qalq-a を対抗せよ。大汗
ムカシ Tung yeke Yüngsiyebü ムハオトカ・チャベル Naiman otor Čaqar を対抗せよ。……

ヘルハあるのが初見である。⁽⁷⁾ アルタン・ムカシ Altan Tobči もまた同様である。⁽⁸⁾ 史料の上でヘルハの名が見られるのはさうのうち十六世紀初頭のムカシが、ムカシはヘルハの形成がいの頃であったとしらうとを意味す

るものではなかろう。

ヘルハ・トウメンは、ダヤン・ハーンの「わゆる諸子分封に際し」、その「子アルチュ・ボトゥ Alču bolad」と
ゲレンセンジュ Geresenje の支配下にある「内」(11)とからむ知られるように、「内」と「外」の二つの部分に分
かれていた。田中克己氏はこの勢力的分裂を、おそらくこのダヤン・ハーンの分封時に「子に分け与えられたためと
述べられてくる。(12)」この見解は有力なものではあるが、また別の見方も可能である。その「内」と「外」の区分が、
トウメンを分ける左翼、右翼から來るものであることは前稿で述べたといふであるが、或いはヘルハの左・右翼間
の分裂がかなり早くから生じていて、ヘルハに対する分封はその上に立つてなされた、と考えることも出来るので
ある。私はむしろこの見解をとりたいが、この点については後で若干述べたい。(13) いずれにしてもヘルハがこうした
複雑な構造を持つており、また史料上にも混亂があり、従つてヘルハに関する従来の研究においても若干の誤解が
あると思われる。これらのうちの一つは松村潤氏の「ウリヤンハンはヘルハの異称」であり、ダヤン・ハーンによ
り滅されたウリヤンハンの故地にゲレンセンジュが分封されたものとする見解である。(14) 事実、ガンガイ・ウルスハ
ル Ganga-yin Urusqal には、氏の指摘する通り「ウリヤンハンのノヤン等の宗族」の項に、
〔ダヤン・ハーン〕の第十一子ゲレンセンジュ・ジャライルはヘルハの首領となつた。その七人の息子は……(以
下略)

と記され、あだがやウリヤンハンがヘルハの異称であるよへどもみえる。(15) そしてガンガイ・ウルスヘルハは、ヘルハのノヤンの族とはアバタイ・サイン・ハーン Abatai sayin qaran の長子サブグタイ・オルジュイト・ホンタ

イハ Saburutai öjeli-tu qong tayiji ムヤの甥にあたる「ムボ・トウシヨト・ベーン」 Gömbö tüsyetu qaran の弟

の系統のみとしている。⁽¹⁹⁾ しかしながらこれには疑問が多い。もしウリヤンハンがハルハの異称であるなら、このこと

とは当然他の年代記にも記載されよいはずであるが、それは全く見られない」といふ。また蒙文年代記では左翼[1]トウメンはチャハルの他に、常にハルハとウリヤンハンを並べてあげている。更に内外ハルハの多くの年代記にはハルハの宗族をガンガイン・ウルスハルのように限定している記録は全く見られないといふ」と。そして後に検討するようにハルハ集団の成立の事情からみてこの見解は受け入れがたく、ハルハとウリヤンハンは別個の集団としてみねばならない。⁽¹⁷⁾

またこれに関連して、和田氏の「ジャライル部がウリヤンハンである」とする見解がある。⁽¹⁸⁾ この理由として氏は蒙古源流にダヤン・ハーンの妃の一人、より正確に言うならゲレ・ボラド Gere bolad とゲレンセンジエの母であるスマル・ベト Sumer qatun がジャライル Jälavir のフトグ・シグシ Qutur sigusi の娘と記されているのに対し、蒙古世系譜・卷四ではこのフトグト・シグシ（呼圖克圖少師）をウリヤンハン（無量漢）の人としていることをあげている。しかしそうにウラジーミルツォアも述べているようにジャライル部はハルハに所属する一オトクであつて、この見解に対しても疑問を抱かざるを得ない。

実は以下に述べるようにダヤン・ハーンのこの妃については蒙文年代記の間に様々な伝聞があり必ずしも一定してはいないのである。ともかくも和田氏が根拠とされたいくつかの年代記の記述についてもう一度検討してみたい。今までの研究によれば、蒙古世系譜はバラチン Karačin の年代記であるが、その内容はほぼアルタン・トプ

中に一致するか、勿論蒙古源流とも多くの点で共通しているが、この部分はやはりアルタン・トプチからの引用である。

しかしながらの点を検討する場合、スマル・ベーン（アルタン）・トプチではサムール・タイヒ Samur tayiqu とするだけを対象とするのは不充分である。実はこれはダヤン・ベーンの母の出身部族とも関連しており、その両者を比較してみる必要があるからである。蒙文年代記では「ダヤン・ベーンの父を」⁽²⁵⁾ 一樣に「ヤン・モンケ・ボルフ・シノン Bayan möngke bolqu jinong ルードルスが、その母シケル・タイヤト Siker tayiqu とシケルの父の所屬する部族」⁽²⁶⁾ である。年代記の間に種々の相違がある。すなわちアルタン・トプチやトサラグチ・ネントイン・テウケ Asarach'i Neretü-yin Teuke 等は「ルカウヤン」のトムゲト・シグンの娘とするのに対し、蒙古源流、ジヤラグベン・トゥルタル Jalarus-un Qurim⁽²⁷⁾、ルル・トゥルジ Sira Turuji 等は「れをウルグーム Ururud のオロジユ・シグン Oroju sigisi の娘」⁽²⁸⁾。ルルが「ダヤン・ベーンの妃であるスマル・ベーン（サムール・タイヒ）」にいじては更に複雑である。アルタン・トプチや蒙古年系譜は「これをウリヤンベーンのトムゲト・シグンの孫娘」とするのに對し⁽²⁹⁾、蒙古源流は「ジャライルのトムゲト・シグンの娘」とある。そして外ハルハの年代記は「これをウルグームのオロジユ・シグンの娘ジメベケン・ベーナ Jimesken qatun やルス」⁽³⁰⁾、まだ「ロル・ルル Bolor Erike ばカラヤンベーンのシグンの娘ジメスケン・ベーナ」⁽³¹⁾。これが表にするところ次頁のよくななる。

この表によると分かるように、この組み合わせで一致するものは少ない。年代記間に多くの相違が見られる。従つてこれらの相違を無視して同じものとするとは問題である。これらの年代記は「やれも異った困難の一

(B) ダヤン・ハーンの妃	(A) ダヤン・ハーンの母	
ジャライルのフトグ・シグシの娘 スメル・ハトン	ウルグートのオロジュ シグシの娘 シケル・タイプ	・蒙古源流
ウリヤンハンのフルグ トシグシの孫娘 サムール・タイプ	ウリヤンハンのフトグ トシグシの娘 シケル・タイプ	・アルタン・トプチ ・蒙古世系譜
ウルグートのオロジュ・シグシの娘 ジメスケン・ハトン	ウリヤンハンのフトグ ト・シグシの娘 シケル・タイプ	・アサラグチ・ネレトイ ・テウケ ・アルタン・クルドウン・ミンガン・ケゲスト・ビチク(28)
ウルグートのオロジュ・シグシの娘 ジメスケン・ハトン	ウルグートのオロジュ・シグシの娘 シケル・タイプ	・ジャラグスン・フリム ・シラ・トゥージ
ウリヤンハンのシグシの娘 ジメスケン・ハトン	ウリヤンハンのフトグ ト・シグシの娘 シケル・タイプ	・ボロル・エリヘ

つを伝えていたのにすぎないのであって、この他に有力な証拠が無い限り、これを以てジャライル＝ウリヤンハンとすむことは出来ない。勿論ダヤン・ハーンの母や妃の出身部族を正確に定めるることは重要なことであるが、ハーンでは問題を異にするのでこれ以上は述べない」とにする。⁽³¹⁾ されにしても、ジャライルとウリヤンハンは次元を異なる集団であり、次章において明らかにする如く、当初ジャライルはハルハに所属する一オトクであり、ウリヤンハンはトゥメンであったのである。

（三）ハルハに所属する諸集団とその関係

すでに述べたようにハルハは内と外の一いつに分かれていたが、それぞれに多くのオトクが所属していた。内モンゴルの年代記ではハルハ全体を讀う場合は常に十二オトクとする。⁽²⁹⁾ しかしこれはオルドス・十二オトク、トゥメト・十二オトク⁽³¹⁾ と、こうようにならうにかなり作為的なものがあり、かつそこから分かれたという外ハルハの七オトクについてはその内容が何であるか殆んど伝承⁽³²⁾ 、アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲスト・ビチク Altan Kürdün Mingran Kegesüü Bičig は「不問 medekü ügei」⁽³³⁾ とされ記している。しかし、外ハルハの年代記作者たるは決して自らを十二オトクとか七オトクとかでは呼んでいない。すなわちハルハに属するオトクの数は当初からずっと多かったからである。

それでは具体的にいかなる集団がハルハに含まれていたであろうか。内ハルハの年代記であるアルタン・クルドゥンやボロル・モリ⁽³⁴⁾ によれば、十六世紀後半、内ハルハにはシャルー Jaruđ⁽³⁵⁾ ハーラン Barin⁽³⁶⁾ ハヤウトハルハ・トゥメン⁽³⁷⁾ などの成立について 森川

Bayaud' ベハサル・Qonggirad' オジヤル・Öjiyed⁽³³⁾ の日本トクがあつた⁽³⁴⁾、まだ外ハルバの年代記である

アサラグチ・ネレーベン・ナウケヤシト・ムカーシニムれば、外ハルバにナヤトヘル Jalayir' ハネゲル Ünected'

イケーム Besiid' ハスハシク Eljigen' ハスヌーム Kirgüd (Kerüd)', ハークルク Toorlus' ハルク・キラク

Quruqu kürüye' ハラクヘル Čügütür' ハハク・ヒル Kökejid' ハタキル Qatagin' ハンダーム Tangrud' サル

タクル Sartarul' ハコヤンクン Uriyangqan の十ノホトクあつた⁽³⁵⁾。今だハルムヘルハ全体ドホトクと呼ば

れる集団はいれだけあつたのである。ハルムホトク初からいれいの集団がみんなヘルハに命おれでいたかは問題があ

る⁽³⁶⁾。ウトガーマルタはヘルバ・トウメンの廿七ウツヤン⁽³⁷⁾の名が見ゆるにかく、滅われたウリヤン⁽³⁸⁾。

トウメンの中の数オトクがヘルバに加えられたと想ぐ⁽³⁹⁾。このウリヤン⁽⁴⁰⁾の滅亡はいつ蒙古源流は、中期

トウメンの一つであるウリヤン⁽⁴¹⁾が、タヤン・ベーンに叛旗を翻し、結局滅われたといふを証べ、その最後に、

〔ウリヤン⁽⁴²⁾・トウメン〕の残つた者を服従めたり、連れて五トウメンに収容し、トウメンなる名を捨てし
めた。

ムルム⁽⁴³⁾。アリム最近の研究によれば⁽⁴⁴⁾のウリヤン⁽⁴⁵⁾の討滅はタヤン・ベーンの業績ではなく後人の業績であ

つたようである⁽⁴⁶⁾。しかし後世トウメンとしてのウリヤン⁽⁴⁷⁾は全く現われや、從つて蒙古源流のこの部分の記述

はウリヤン⁽⁴⁸⁾討滅後の何らかの事實を伝えたものとも考へられよう。やなわら和田氏⁽⁴⁹⁾のウリヤン⁽⁵⁰⁾の討伐

も関連して、その潰滅の後、やいじかホ Urad (鷲隈特)、マダ・ミンガン Maru mingyan (明安)、ムハグ⁽⁵¹⁾・ケウケム Dörben keiked (巨千) 等があのうねたじふを明かに知れど、上記のものがマダ・ミンガ

はトウメトに所属し⁽⁴⁰⁾、ウラトとドルバン・ケウケト（ケウケトとして）はオルドスに所属している。⁽⁴¹⁾ とすればハルハにおけるウリヤンハン・オトクもこれと同様にみれないこともない。しかしこの場合、単なる名称の一一致だけそれを結びつけることには問題がある。というのは当時ウリヤンハンという名前の集団はモンゴリアに広く見られたからである。そしてそれらのうち東部のウリヤンハン三衛や、北西部のウリヤンハンは著名なものである。⁽⁴²⁾ 従つて単なる名称の一致からだけでは決め難いものがある。ただいずれにもせよハルハの名のもとに成立した集団の初期の形と、先にみたハルハ集団との間に、内容的に大きな違いがあつたとは思われない。

ところやこれら多くのオトクは、年代記において、いわゆる諸子分封を記す際に全く同列に並べられている。しかしこれは表面的なことで、その間に集団の大小、勢力的な強弱があつたことは容易に察しがつく。とすればこれらの集団において、特にダヤン・ハーンの子孫たちの支配下に入る前において、じつした力関係に基づいて支配・被支配の関係もあつたとみねばならない。

内ハルハは五オトクとして知られるが、そのうちダヤルート部が注目される。蒙古源流はダヤン・ハーンのいわゆる右翼部討征について記している中で、その功績者の一人としてジャルート部のバガスン・ダルバニ Barasun darqan の名をあげ、その功績によりダヤン・ハーンの唯一の娘トロルト・ゲンジ Törlötü günji を与えられタブナン tabunang になったことを記している。⁽⁴³⁾ 更にウリヤンハンの討伐に際しても彼はハルハの代表者として名を連ねている、内ハルハは後にダヤン・ハーンの子アルチュ・ボラム Alču bolad の支配するところとなるが、その子フラハチ・ハサル・ノヤン Quraqači qasar noyan を経て更にその息子たちの代になつた時、長子であるウバシ

・ウイジン・ノヤン Ubasi üijeng noyan がシャルーム・オトクを分封されて、内ハルハにおいて、チャルート部が有力な集団であったとみてよいであろう。

しかしながら、内ハルハにおいてはこの他に注目される集団がある。それは同じようない五オトクの一つに数えられているホンギラート部である。ホンギラート部の名前は元代から著名であるが、中期においても年代記の中に比較的早く現われる。蒙古源流やアルタン・トプチによれば、ハルグチュク・タイシ Qarlučur tayiji とエセン・タイシ Esen tayisi の娘セチク・ベイジ Sečeg beyiji との間に生まれた子、すなわち後のバヤン・ムンケ Bayan möngke がエセンの迫害を受け殺されそうになった時、これを助けて四人のサイトたちが、蒙古源流ではウルグームのオロジ・シグシのところへ、アルタン・トプチではウリヤンハンのフトゲト・シグンのところへ護送した」とが記されているが、その四人のサイトの中にホンギラート部のアサリ・タイブ Asali tayibu の名が見える。⁽⁴⁵⁾ 更にダヤン・ハーンの右翼部討征に関連してやはり同部のバーチル・クリスン Baratur kürisün の活躍が記され、その功績によりダルハンとなつたといふ。⁽⁴⁶⁾ ホンギラート部が元代においてかなりの勢力を有していたとは言うまでもないし、またいに記されたアサリがタイプ（太保）の称号を持っていることも注意されよう。これらの僅かな例からではあるが、ホンギラート部も内ハルハにおける有力な集団であった、ということが言えよう。

しかしながら一つの集團が同時に顯著であった、というわけではない。すなわちチャルート部の名はダヤン・ハーンの右翼部討征をきっかけとして現われ、それ以前は全く見られないのに對し、これ以前までしばしば見えていたホンギラート部の名は、以後年代記の中に殆んど見えなくなつていて、また内ハルハの他の諸集團は、かなり後に

なるまで年代記の中に登場しない。以上の事柄は、内ハルハにおいては当初ボンギヤト部が最も有力であったが、後その地位がジャルート部に代られた、ということを意味するものではないだろうか。⁽⁴⁸⁾

それではこの点外ハルハにおいてはどうであったか。外ハルハの年代記はいのいとて関して非常に興味ある話を伝えている。例えばシラ・トウージはダヤン・ハーンの末子ゲレンセンジュが外ハルハに分封された事情を次のように述べている。

ゲレンセンジュがセキシグ Doloran qosuru に幽した事情は、ダヤン・ハーンのといふにチノベ Činos 部のウダ・ボロト Uda bolod が毎年野生のラバを殺して乾したもの届けていた。ある時彼が行く時、「隸民 qaraču kümün をジャライルとケルーム Kerüd のシグチ sigči たゞが支配している。彼らにじらして支配させようか。今私はハンなるエジヨンから一人の息子を求めるために来たのである」と申し上げれば、ハーンは同意しヤジタスケン・ベトの上の子タナ・ボホト Gere bolad を与えた。ウダ・ボロトは翌年タナ・ボホトをベーンのところに連れて行って申し上げるには、「ヒシヨンなるハーンの子の横着は甚しい。長 eki のじたいハルハの「人衆の」性質は荒い。育てられたあなたのアルバトウ albatu がこれより後苦痛を持つて従つたひどうしよう」と返して來た時、遊んでいるゲレンセンジュと「う名の子を連れていたのを知つて、ハーンの側にいる大臣たちが言つたは、「ハーンは悪んで自分の子を賜つたのに反対に送り返した。今どうして秘かに盜んだゆくのか。追つて処罰しなよ」と言ふと、ハーンは「奴隸 borol となして使うのではないから連れて行くがよい」と聞いて追わせなかつた。ウダ・ボロトは自分の子として育てて、オジイヒト Öjijed のムング

ジイ・ダハル Mönghüejü darura トットンハイ Qatunqai といふ名の娘、ウリヤンバノのメハルウ Mendü のムンゲイ Mönghüü ルンハの名の娘の娘のルの一人のハヌ quda となれうと婚約した。……

シラ・ムウーシュ ⁽⁵¹⁾ はわざケンシヨは一五一二年生まれで、娘子アシハイ・ホンタイシは一五三〇年生まれであるとするが、ルリに記されたことは十六世紀初頭のことである。これによれば當時外ハルハをジャライルとケルート（アサラグチではキングート）のシグチたちが支配していたことである。もう少しの年代記を証したシャステイナ氏はこの部分をただ「ジャライル部のシグチたちが支配している」とだけ証し、ケルートについては欠落させている。しかしこの部分は明らかに「ジャライルとケルートのシグチたち」であり、この点はシャステイナ氏の誤脱であろう。しかし問題はそれで終るのではない。アサラグチ・ネレトイ・テウケもほぼこれと似たことを伝えていながら、ルの部分を次のよう証している。

昔ダヤン・バーのルハのチノス語のウダ・ボラトなる者が来て、「今ハルハをジャライルのシギチ sigici たらが支配してゐる。ヒジョンの生んだ子を与えよ」と頼んだ。

やだねりにはただ「ジャライルのシグチたら」とのみ証され、ケルート（キングート）については何ら証されていない。ガルダン Galdan のルハリーン・シリク Erdeni-yin Erike もアサラグチと同様のことを行えていた ⁽⁵²⁾。従つてシヤルにせよルハ非常に問題のある部分なのである。ルルの年代記の間に相違が見られるのは何故か。思うにこれは決して理由の無しとは言へない。

まあ外ハルハにおいてジャライルとケルートの両オトクがいかなる関係にあつたかを明らかにせねばならない。

欽定外藩蒙古回部王公表伝、卷四十五、土謝國汗部總伝、卷六十一、扎薩克國汗部總伝によれば、外ハルハは普通のトゥマンと同様、左、右二翼に分かれていたことが知られるが、ゲレセンジンの長子アシハイ・ホンタイジ Asiqai qong tayiji が右翼部を、第三子ヌグヌフ・ウイジョン・ノヤン Nurumuqu üjeng noyan が左翼部を統轄したということはすでに前稿で述べた。⁽⁵⁵⁾ ところでアサラグチやシラ・トゥージによればアシハイ・ホンタイジはジャライルとウーシン Üüsün (アサラグチではウネゲトとする) の二オトクを、またヌグヌフ・ウイジョン・ノヤンはケルート (アサラグチではキレグート) とガルラスの一オトクを分封されたという。⁽⁵⁶⁾ すなわち右翼部長たるアシハイの分封地の一つにジャライルが、また左翼部長たるヌグヌフの分封地にケルートが含まれているのである。このことはシラ・トゥージの伝えるところからすれば決して偶然ではない。この二つの集団がそれぞれの翼の中でもかなり有力な集団であった、ということは決して無理な推測ではあるまい。そうであるとするならこのことは更に、外ハルハにおいて、このジャライルとケルート両集団が、「支配的」集団であったことをも意味するのではないかうか。つまりシラ・トゥージの「ジャライルとケルートのシグチたちが支配している」という表現はまさにこのとを反映したものと考えられる。

それではジャライル部とケルート部の関係はどうであつたかと言えば決して対等であつたのではない。その実質的な勢力がどうであつたかは詳らかではないが、いくつかの年代記に記されている事柄から検討を加えてみよう。すでに記したようにダレセンジエの長子アシハイがジャライル部を、第三子ヌグヌフがケルート部を得ていていることからして、まずジャライルがより優勢な集団ではなかつたかと推測される。このことはいくつかの点から裏付けられ

れる。その一つは外ハルハの支配者となつたゲンセンジ^{ジンジ}が、多くの年代記の中ドジャライル・ボンタイジ、Jalayir qong tayiji と呼ばれてゐる⁽⁵⁷⁾。更に蒙古世系譜は外ハルハをジャライル・ヘル^{ヘル}、Jalayir Qalq-a と呼んでゐる⁽⁵⁸⁾。

これが外ハルハにおけるジャライル部の優位^{ゆうび}を示すものでなくして何^{どう}なるべ。蒙古源流がダヤン・バーンの妃の一人をジャライル出身としているのむりとした事情によるものであつて⁽⁵⁹⁾。これが点からみて、十六世紀初頭において、ジャライル部が外ハルハを代表する集団、言い換えるなら、外ハルハとさう集団をまとめてあげる点において最も影響力のあつた集団であつた、といふことが出来るのである。アサラグチャニルデニイ・ナリクの「ヘルハをジャライルのシギチたちが支配してゐる」⁽⁶⁰⁾ といふのは、じつを伝えたものと理解してよがる。これに附言するならば、蒙古源流による「バルス・ナカル・シヘン Barsu bolad Jinong の長子でその名への号を継いだグン・ムリク・マルゲン・シヘン Gün biling merger Jinong の妃の一人にアバガ・ヘルゲン・ヘル Abara bergen qatun ガル⁽⁶¹⁾が、彼女の父はおもへジャライルのヒヤン・シゲチン Esen sigečin であった」とある。このことによつても外ハルハの年代記の伝聞が信憑のにおけるものであることが伺われよう。

以上十六世紀初頭のヘルハにおける諸集団の関係を検討した。すなわちヘルハに所属する集団の中で、内ヘルハにおこなはるかはボンギラト部が、後にはジャルート部が最も有力な集団であり、外ヘルハではジャライル部が最も有力であつたといふを明らかにした。それでばらばらした形の集団とその関係がどのふうな要因から生み出されたものであらうか。

(四) ハルハ集団と元代左手五投下部族群

十六世紀前半のハルハにおける以上のような情況が、中国における元朝の滅亡後、モンゴリアにおいて長期に亘つて起こつた様々な政治的事件の影響を受けたものであることは言うまでもない。ただその影響がどのような形に現われているかは別として、果してこののような形態の集団がこの時代になって全く新しく生み出されたものであるうか。これを検討する史料は今のところ無いが、ハルハの場合、その源流をもひと古へに求められると思われる。しかばねそれは何であろうか。

護雅夫氏の研究によると、元代の東モンゴリアには五つの大きな投下領、すなわち、いわゆる「左手の五投下」⁽⁶¹⁾があつたといふ。⁽⁶²⁾投下⁽⁶³⁾というのは、「諸王、駙馬、功臣の分地」であり、また「部族的封建領を意味するもの」と考えられているが、その意味の厳密な説明はとむかくとして、護氏によればこの「左手の五投下」というのはジャライル部を総帥とする、ジャライル部、オングガト部 Onggirad (Qonggirad) 部、イキレス Ikires 部、ウルート Urud 部、モングーム (マングーム Mangrud) 部の、五部族の投下であつた⁽⁶⁴⁾。またこれらの部族の投下領の場所について護氏は、ジャライル部はオナン Onon、ケルン Kerülen 両河の地点から合流点にかけて、ウルート、マングーム部はその東方、両河の地に、またオングガト部と/or/の「一門」のオルフヌード Olurunud、ハラス、イルゲキン Igekin や、またイキレス部はフルン、トヨル両河の北アルゲン、ガン河流域にあつたと述べられる。そしてこれらの部族のうちジャライル部は元朝秘史に「木合黎國王は左手の合喇溫只敦に凭れる万戸を知れ」と記されている

ように⁽⁶⁶⁾、チンギス・ハーンの治世の当初から万戸 (tumen) となつてゐたことが知られるが、更にその後イキレス、マングート、オングラート、ウルートの各部も次々と万戸に発展したという。⁽⁶⁷⁾ 更に氏はモンゴリア西部、ほぼアルタイ山付近にもアルラート Arlat 部を最有力集団とするアルラート、スルドス Süldüs、バーリン、ウリヤンハン、フーシン Hügüsın のいわゆる“右手”五部族の投下があつたと述べられている。そして護氏はこの投下領の主要な軍隊こそ探馬赤 tanmači 軍であつて、例えば金国の討征はジャライル部のムカリを筆頭とする左手の諸投下探馬赤部族により主に行なわれ、中でもジャライル部とそれに直属する先鋒部族の活躍は著しかつたと述べられている。⁽⁶⁸⁾ 以上護氏の研究により、元朝初頭においてモンゴリア東部ではジャライル勢力の力が強かつたことが知られるわけであるが、この状態はその後もずっと続いたようである。チンギス・ハーンの功臣の一人であつたこのジャライルのムカリは国王の称号を得てゐるが、和田氏によれば、この称号はムカリの子孫に次々と継承され、その七世の孫俺木哥失里にまで、すなわち元朝最後の皇帝である順帝の時代にまで及んでゐるのである。⁽⁶⁹⁾ これによつて少なくともジャライル部の勢力が元朝一代を通じて保持されたことが知られるが、元朝崩壊以後もその力を保つたようである。明実錄洪武二十年六月丁未 (二十九日) の條に、故元將納哈出が明の朝廷に降つたことが記されている。それによればこの時降つた納哈出の所部は十余万あり、この時の降衆は全部で二十余万もあつたといふ。この数字がどこまで信頼するに足るかは問題であるが、納哈出の勢力が非常に大きなものであつたことには変わりない。そしてこの納哈出こそは國初群雄事略に「納哈出木華黎裔孫也」と記されているように、ムカリの後裔であり、当然ながらジャライル氏の出であつた。従つて明初においてもかなり長期に亘り興安嶺、遼東の地においてジャライル系

の勢力が強かつたことが証えるのである。といふやドンの納哈出は洪武⁽¹⁾十一年七月に死亡し、その後その子の察罕が瀋陽侯として封ぜられてゐる。しかし彼は洪武⁽²⁾十六年、藍玉の党に座して伏誅されたといふ。中国史料において、元朝からの直接のジャライル氏の系統の動静はいゝままだといれるが、その後モンゴリア東部、遼東、興安嶺地方のジャライル勢力がどうなつたかを明史料から知るいとは殆んど出来ない。

ところで和田氏の研究によれば中期の六トウメンのうち左翼部のヘルハはチャハル Čaqar の北辺に接してヘルハ河を中心とした地方にあり、ウリヤハンはオルドスの北部、ヨンシヒバ Yüngsiyebü の北部を指し、チャハルは今克什克騰 (Kesigten) 部を含んでほぼ錫林郭爾盟の境内にあつたといふ。⁽³⁾ ハルハとばれの左翼三トウメンは元朝の左手の投下の位置を指しており、なかんづくヘルハはその全域がその地位に含まれてゐると言えよう。このことはヘルハ集団の形成にとっても大きな意味を持つていたと考えられる。

結論から先に言うなら元代の左手の五投下部族群と中期のヘルハ集団の間に密接な関係があつたといふことである。地理的位置の共通性はいま述べた。更にそこに所属する部族集団の名称からしても多くの共通点をみるといふことが出来る。トゥメンであつたジャライルやホンギラト (ОНгират) はその著しいものである。その他ホンギラトの一門であつたといふガルラス、イルジゲン⁽⁴⁾や、左手五投下の地に安置されたといふバヤウト⁽⁵⁾、更にはバーリン等があげられよう。これらはすべてヘルハのオトクとして現われてゐる。これらに加えて左手五投下の中でも優位にあつたジャライル部とホンギラト部はやはりヘルハ・トウメンにおいても有力な集団であつた。すなわち元朝左手五投下部族群とヘルハ・トウメンとの間に重要な点において相違をみるいとは出来ない。

勿論ハルハ集団と左手の五投下部族群が全く同一の集団であるのではない。事実ハルハ集団を構成していたオトクの中にトゥメンにまで発展したというイキレス、マングート、ウルート等の名を見ないし、また先に述べたように中期に入つてかなり後に何らかの原因で組み込まれた集団もあった。元朝崩壊とハーン一族の衰退、明の永楽帝の北方遠征、更にはトガン、エセンと続くオイラト勢力の東モンゴリアへの浸透等、これらの事件のいずれをとつても、かつての部族集団の受けた影響は小さくなつたはずである。従つて左手の五投下部族群のいくつかの有力な部族が没落し他の集団に吸収されたとみると出事よう。しかしながら多くの異つた点はあるにしても先にみた基本的な点が一致している以上、中期に見られるハルハ集団とは、元代の左手の五投下部族群を淵源として成立したものであることは間違いない。

ところで左手の五投下部族群的集団が、如何にして保たれ、ハルハ集団に移行し得たのであろうか。当然ながら、後世オトクとして現われる、それらを構成していた個々の集団がバラバラに存在していたとは考えられず、少なくとも一個の集団としてあり得た以上は、その中にその集団を統率する中心的集団があつたと見るべきである。とすれば後世「ハルハを支配していた」ジャライル部こそその最も有力なものと言えよう。先にみたように、それは五投下部族群の統轄部族であり、元朝を通じてモンゴリア東部で大きな勢力を誇り、明初にまで至つている。そして十六世紀始めにおいても、ほぼ同地域で、最も有力な集団として、存在していた。勿論この間史料的に百年余りもの空白があり、この点無視し得ないものがある。しかし十六世紀初頭においてハルハを「ジャライルのシグチたちが支配している」という情況は、その間においてもジャライルの勢力には、それ程大きな変化はみられなか

つた、と考えられよう。勿論アサラグチや、シラ・トゥージは外ハルハの年代記であり、従つてそこに言うハルハとは外ハルハを指すものであるが、以前はハルハ全体に及んでいたのではなかろうか。ハルハ集団が元代左手五投下部族群の延長上にあるものとすれば、以上の推測は決して不当なものではあるまい。従つてハルハ集団の形成において、ジャライル勢力が最も大きな役割を果した、と言ふのが出来よう。

ハルハは後にいわゆるダヤン・ハーンの六トゥメン *Jirruyan tümen* の一つに組み込まれたわけであるが、先に述べたようにハルハは右翼・左翼を単位として分裂した。若干のことはさておこう。この分裂した事情についてはともかく、それがダヤン・ハーンのいわゆる分封以前に生じていたものと考えたい。その理由の一つは、前章で引用した、ゲレセンジエが外ハルハを支配するようになった事情である。この場合彼を養子としたウダ・ボロトの行動が内ハルハとは無関係にならざっている。このことは内外ハルハが殆んど独立した状態にあった証左であろう。他の理由は、両ハルハの対ハーンに対する関係の相違である。すなわち内ハルハの場合ハーンとはかなり緊密な関係にあったのに對し、外ハルハはそうでなかつたようである。例えば前章でも述べたように、ダヤン・ハーンの右翼部討征や、ウリヤンハンの反乱鎮圧等において活躍しているのは内ハルハに所属する者たちであり、この際ジャラールトのバガスン・ダルハンがダヤン・ハーンの公主を娶つたということはその顯著な例である。これに対し外ハルハがハーンに對して全く無関係の状態にあつたといふことはないけれども内ハルハに比較すればかなり稀薄であつた感は免れない。ともかく外ハルハはずつと後になるまで政治的な事件には殆んど現われていないが、これは強ち史料のせいだけとは言えまい。十六世紀後半、トゥメン・ジャサクト・ハーン *Tümen jaśartu qaran*

が各トゥメンの有力者にジャサクを与えた時、ハルハの代表として内ハルハのバーリン部のシユブハイ *Subugai*⁽⁷⁸⁾ がそれを得たこと、また同じころ外ハルハのトウシエト・ハン部の祖アバタイがハーンを唱えていること等は、ハルハの分裂の根の深さを示すものに他ならない。従つてこれらのことも内・外ハルハの分裂がかなり早いものであつたことを示すものであろう。

以上本章では中期のトゥメンの一つとして現われるハルハ集団が、かつての左手の五投下部族群の延長上に成立したものであり、その過程においてはジャライル部が最も大きな役割を果したこと述べた。

(四) 外ハルハとジャライル族

後世外ハルハの諸集団はすべてゲレセンジエの子孫たちが支配するようになつた。しかしながらこのことは旧来から有力な部族の力がただちに衰えたことを意味するものではない。ハルハの新しい支配者となつたゲレセンジエやその子孫たちは決して彼らの力を無視することは出来なかつたはずである。ただ後世の年代記はすべてボルジギン氏族の活動やその系譜に重点を置き、彼らと同じように活躍していた多くの部族については殆んどと言つてよいくらい記していない。しかし年代記の一部にはこれらゲレセンジエとその子孫が、いかなる部族の者と婚姻を結んだかを記しており、それによつてこれらの部族の動向をある程度知ることが出来、それはまた重要な問題を含んでゐる。

オルドスのグン・ビリク・メルゲン・ジノンの妃の一人アバガ・ベルゲン・ハトンがジャライル族の出身であつ

た」とは先に述べた。当然のじんながら外ヘルハにおいてはその支配的な集団であつたジャライル族とボルジギン氏族との間の通婚の例は非常に多い。しかし問題はそれだけでは無い。重要なことは、この関係の中からのみ後のヘルハの有力な支配者が現われてゐる。すなわち両者の関係の中でも次の一例が注目される。

〔⁽²⁾〕ゲレゼンジンの長子トシベイ・ポンタイシの妃の一人はジャライルのオルチャチ・ミンカン Olčaci mingcan の娘、アルタガン・ベーナ Altaran qatun であった。⁽³⁾

〔⁽¹⁾〕同じくゲレゼンジンの第三子スクリフ・ウイジン・ヘヤンの長子トバタイ・サイン・ベーナ Abatai sayin qatun 〔⁽⁴⁾〕第三妃はジャライル出身のホルマン・セチナ・ベーナ Qolman seçen qatun である。⁽⁵⁾

〔⁽³⁾〕ゲレゼンジンの第四子アミン・ムカヒヘル・ノヤン Amin duraqal noyan のトモール・ブイヤム Mooru buyima の妃はジャライル出身のイマガン・グトゥン Imaran tuturun である。⁽⁶⁾

以上にあげた三例について更に補うならば、〔⁽⁷⁾〕トシベイ・ポンタイシとアルタガン・ベーナの間に生まれた子のヘルハ、長子バヤンダラ Bayandara の系統は後のジャサクト・ベーナ部、Jasartu qan ayimai と連ながら、⁽⁸⁾ 次子トウメン・ダラ・ダイチン Tümen dara dayičing は後の外ヘルハの実力者の一人で、ロシア史料にアルトゥン・シテー Altyн пэрь として知られるカバノ・ポンタイシ Ubasi qong tayiji の父である。⁽⁹⁾ 〔⁽¹⁰⁾〕アバタイ・サイノ・ベーナは周知通り外ヘルハに黄幡派ラマ教を導入し、またその領域拡大に貢献した実力者であったが、この妃の間に生まれたトヨリイケイ・ヘルカン・ベーナ Eriyekel mərgen qatun は後のトウシヌル・ベーナ部 Tüsijetu qan ayimar の系統にいたがる。⁽¹¹⁾ 〔⁽¹²⁾〕の間に生まれたシニアイ・ダライ・セチナ・ベーナ Šoloi

dalaï sečen qaran さやチヨン・ベノ部 Sečen qan ayimai⁽⁸⁶⁾ の始祖である」と。語のまでもなく、このジャサク

ト・ハノ、ムウシヨム・ベン、セチヨン・ベノの三部は十六世紀後半から外ハルハを分けた三大集団である。これら
の支配者は今見ただようにすべてゲレンセンジョの子孫とジャライル族との婚姻によって生まれた子の系統から出で
る。このことは前章において述べたことよりすれば決して偶然の結果ではない。恐らくは當時、ハルハにおいて真
に実力者たり得たのは、ゲレンセンジョの子孫であると同時にジャライルの血をひくものでなければならなかつたと
言えよう。事実アバタイ・サイン・ハーンの長子はその第一妃でブルム出身のゼンギル・ベト⁽⁸⁷⁾ Dönggir qatun
との間に生まれたサブグタイ・オルジヨイト・ホンタイ⁽⁸⁸⁾ Saburutai öljei-tü qong tayiji であつた。またセチ
ヨン・ハン部の祖モール・ズイマはアミンの第三子でもある⁽⁸⁹⁾。

両者間のこうした例はその他にも見られ、またボルジギン氏の女子がジャライルの男子に嫁している例も多い。
こうした形態がすべて同じ結果を生んだわけでは無いが、ゲレンセンジョの子孫たちが、ハルハの中で最も有力な集
団であつたジャライルと婚姻関係を結ぶことにより、自らの勢力の拡大を企図したことも疑いないだらう。

しかしながらジャライル族の勢力がいつまでもハルハにおいて維持されていったかどうかはまた別個の問題であ
る。ジャライル・オトクがゲレンセンジョの長子アシハイ・ホンタイジに与えられたことはすでに述べた。それでは
この集団はその後どうなつたか。残念ながら蒙文年代記は以後について全く記していない。ただ我々には十七世紀
初頭の外ハルハの情況を伝えた記録がある。それは一六一八⁽⁹⁰⁾一九年にロシア皇帝の命を受けてロシア人として始
めてモンゴリアを通り、中国（明）に達した、イワン・ペトリン Ivan Петрин の報告である。彼はトムスクを出

発し、ウプサ・ノール付近にあつたアルトウン・シアーリの本營を経て南東に下り、ゴビを通り、帰化城を経由して北京に達している。ハルハについて彼は次のように報告している。⁽⁹⁾

Иличин へばあはつヘヤンタイビウサホウボダルジク・オトクであら、 Тайчин-Черекту へばんの孫のバーレ・⁽⁸⁵⁾

ダイチン・シマラクト Badma dayičing ѡориту へじアドある。更に Гирот へばんヤンシの第III子マグマフ

に分封されたケルート (キンダート)・オトクの へじアド⁽⁸⁶⁾あり、その Чечен нон へばクダマフの孫で後のサイン・

ヘヤン部の祖となりた йодба sečen noyan へあたる。⁽⁸⁷⁾

以上の点は年代記の記録とも完全に一致しており何ら問題はない。へじアドが問題なのは最初に記される Тормош-

ин, Каракула,, Парь Часакт ほの所領である。じのへじアド Парь Часакт へは初代ジャサクム・ハーンのハバーナ

イ Sobantai の へじアド⁽⁸⁸⁾。 Тормошин へばんの弟のウバーンタイ・サルジャ・ダルマシリ Ubantai sarja darmasiri

の へじアド⁽⁸⁹⁾。また Каракула へじアドのばかバーン・ポンタイジの孫ドウンハイ・ベトトホ Mingqai qaraqula

の へじアド⁽⁹⁰⁾。 ピトリンの轍町によれば彼らの所領はそれぞれ Сулдус, Алгунат, Чекуркуш へじアド⁽⁹¹⁾など

である。 Сулдус へば勿論 Suldius へじアド Алгунат はチングス・ハーンの母ボルンの出身部族オルグヌース Olurunud

と関係があるのだらう。ただ Чекуркуш へじアドは如何なる集団であるが分らぬ。しかしながらひずみたよ

うに彼らの祖たるアンハイ・ポンタイジが分封されたのはジャライルとウネゲトの二オトクであった。ピトリンの

報道によれば分るよるにゲレンセンジの七子に分封されたオトクはそのおまけ子孫に受け継がれている。じのへじ

はまだ、ウバーン・ポンタイジ伝に記されねりヤンハイのサイン・マジク Sayin majir がゲレンセンジの第七子

じウリヤン・ベン・オトクを分封されたサム Samu の子であつたといふ点がふしきあがちます明確である。とすればアンハイの子孫たちもジャライルをしくばウネゲトを支配してこたばやであるが、ピトリンの報道では全く異つ

て いる。また時のアルトゥン・ツアーリ、すなわちアシハイの孫にあたるウバシ・ホンタイジの所領は、蒙古遊牧記によれば和託輝特 (Qoto qoyid) と呼ばれたようではやはり異なる。⁽¹⁸⁾勿論ペトリンの報告は地域的な限界があり、従つてそれのみで結論を出すことは出来ないが、いくつかの見方が出来よう。一つはもと別のところで、集団を形成していたということであり、また他の一つはジャライル族に何らかの政治的変化が生じ勢力が弱まつたとする見方である。ゲレンジュの諸子分封はずつと東で行なわれたものであり、前者の見解も取り得るが、他の集団とその支配者との関係からすれば、当然ソパンタイにしる、ウバシ・ホンタイジにしるジャライルを支配しているべきであり、このことからすれば後者の見解も取り得る。しかしこのことは中期社会のオトクが如何なるものであつたかを含めた、より厳密な考証を要する問題であり、ここでは若干の疑問を提出するにとどめる。⁽¹⁹⁾

(六) おわりに

以上中期モンゴルのトゥメンの一つである哈尔ハ集団とその形成を中心若干の問題を検討した。これをまとめると次のようである。すなわちまず集団としての哈尔ハの名が文献の上に現われるのは漢文・蒙文兩史料とも十六世紀初頭のことであった。哈尔ハ・トゥメンは左右両翼を基礎に内と外の二つに分れたが、それぞれに数多くのオトクが含まれていることを示した。更にこれらのオトクの間の力関係について検討し、内哈尔ハにおいてホンギラト部が、後にはジャルート部が最も有力であり、外哈尔ハにおいてはジャライル部が最も有力であつたことを指摘した。そしてこれらのことから明らかになつた、哈尔ハに含まれる諸集団、その力関係、更には遊牧地の類似等か

哈尔ハ・トゥメンとその成立について

森川

いみて、ヘルハの淵源が、元代の左手五部族投下群に求められるいふ、まだそれからヘルハ集団への移行においてジャライル部が中心的役割を果したことを述べた。ヘルハにおけるジャライル勢力はその後外ヘルハに限定されるが、ヘルハを三分した三汗部の首長の「すれめ」やライルの血を引いてゐる」とかひみて、その力が並々ならぬのであつたことが知れよう。かくして從来殆んど明らかにせれなかつた中期モンゴルのトウメン形成について、その一端を明らかにし得たと思ふ。

(大阪大学文学研究科博士課程)

注
(前掲書、111-19頁) りども從へるゝは出来だ。

- (1) 森川「中期モンゴルにおけるトウメンについて」『史學雑誌』八十一編、1号。
- (2) 和田清『東亞史研究(蒙古編)』東京、一九五九、七七六頁。
- (3) 岡田英弘「カバシ・ホンタイジ(近著編)」『遊牧社会史探求』第三三冊、一九六八、九頁。
- (4) 和田前掲書、111四頁。
- (5) ガルダン Galdan オハルハ ハイ・ハニイ Erdeni-yin Erike もはヘルハの名の由來が若干記載するといふが、これは別の機会で述べた。
- (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100) (101) (102) (103) (104) (105) (106) (107) (108) (109) (110) (111) (112) (113) (114) (115) (116) (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129) (130) (131) (132) (133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147) (148) (149) (150) (151) (152) (153) (154) (155) (156) (157) (158) (159) (160) (161) (162) (163) (164) (165) (166) (167) (168) (169) (170) (171) (172) (173) (174) (175) (176) (177) (178) (179) (180) (181) (182) (183) (184) (185) (186) (187) (188) (189) (190) (191) (192) (193) (194) (195) (196) (197) (198) (199) (200) (201) (202) (203) (204) (205) (206) (207) (208) (209) (210) (211) (212) (213) (214) (215) (216) (217) (218) (219) (220) (221) (222) (223) (224) (225) (226) (227) (228) (229) (230) (231) (232) (233) (234) (235) (236) (237) (238) (239) (240) (241) (242) (243) (244) (245) (246) (247) (248) (249) (250) (251) (252) (253) (254) (255) (256) (257) (258) (259) (260) (261) (262) (263) (264) (265) (266) (267) (268) (269) (270) (271) (272) (273) (274) (275) (276) (277) (278) (279) (280) (281) (282) (283) (284) (285) (286) (287) (288) (289) (290) (291) (292) (293) (294) (295) (296) (297) (298) (299) (300) (301) (302) (303) (304) (305) (306) (307) (308) (309) (310) (311) (312) (313) (314) (315) (316) (317) (318) (319) (320) (321) (322) (323) (324) (325) (326) (327) (328) (329) (330) (331) (332) (333) (334) (335) (336) (337) (338) (339) (340) (341) (342) (343) (344) (345) (346) (347) (348) (349) (350) (351) (352) (353) (354) (355) (356) (357) (358) (359) (360) (361) (362) (363) (364) (365) (366) (367) (368) (369) (370) (371) (372) (373) (374) (375) (376) (377) (378) (379) (380) (381) (382) (383) (384) (385) (386) (387) (388) (389) (390) (391) (392) (393) (394) (395) (396) (397) (398) (399) (400) (401) (402) (403) (404) (405) (406) (407) (408) (409) (410) (411) (412) (413) (414) (415) (416) (417) (418) (419) (420) (421) (422) (423) (424) (425) (426) (427) (428) (429) (430) (431) (432) (433) (434) (435) (436) (437) (438) (439) (440) (441) (442) (443) (444) (445) (446) (447) (448) (449) (450) (451) (452) (453) (454) (455) (456) (457) (458) (459) (460) (461) (462) (463) (464) (465) (466) (467) (468) (469) (470) (471) (472) (473) (474) (475) (476) (477) (478) (479) (480) (481) (482) (483) (484) (485) (486) (487) (488) (489) (490) (491) (492) (493) (494) (495) (496) (497) (498) (499) (500) (501) (502) (503) (504) (505) (506) (507) (508) (509) (510) (511) (512) (513) (514) (515) (516) (517) (518) (519) (520) (521) (522) (523) (524) (525) (526) (527) (528) (529) (530) (531) (532) (533) (534) (535) (536) (537) (538) (539) (540) (541) (542) (543) (544) (545) (546) (547) (548) (549) (550) (551) (552) (553) (554) (555) (556) (557) (558) (559) (560) (561) (562) (563) (564) (565) (566) (567) (568) (569) (570) (571) (572) (573) (574) (575) (576) (577) (578) (579) (580) (581) (582) (583) (584) (585) (586) (587) (588) (589) (589) (590) (591) (592) (593) (594) (595) (596) (597) (598) (599) (600) (601) (602) (603) (604) (605) (606) (607) (608) (609) (610) (611) (612) (613) (614) (615) (616) (617) (618) (619) (620) (621) (622) (623) (624) (625) (626) (627) (628) (629) (630) (631) (632) (633) (634) (635) (636) (637) (638) (639) (640) (641) (642) (643) (644) (645) (646) (647) (648) (649) (650) (651) (652) (653) (654) (655) (656) (657) (658) (659) (660) (661) (662) (663) (664) (665) (666) (667) (668) (669) (670) (671) (672) (673) (674) (675) (676) (677) (678) (679) (680) (681) (682) (683) (684) (685) (686) (687) (688) (689) (690) (691) (692) (693) (694) (695) (696) (697) (698) (699) (700) (701) (702) (703) (704) (705) (706) (707) (708) (709) (710) (711) (712) (713) (714) (715) (716) (717) (718) (719) (720) (721) (722) (723) (724) (725) (726) (727) (728) (729) (7210) (7211) (7212) (7213) (7214) (7215) (7216) (7217) (7218) (7219) (7220) (7221) (7222) (7223) (7224) (7225) (7226) (7227) (7228) (7229) (7230) (7231) (7232) (7233) (7234) (7235) (7236) (7237) (7238) (7239) (72310) (72311) (72312) (72313) (72314) (72315) (72316) (72317) (72318) (72319) (72320) (72321) (72322) (72323) (72324) (72325) (72326) (72327) (72328) (72329) (72330) (72331) (72332) (72333) (72334) (72335) (72336) (72337) (72338) (72339) (72340) (72341) (72342) (72343) (72344) (72345) (72346) (72347) (72348) (72349) (72350) (72351) (72352) (72353) (72354) (72355) (72356) (72357) (72358) (72359) (72360) (72361) (72362) (72363) (72364) (72365) (72366) (72367) (72368) (72369) (72370) (72371) (72372) (72373) (72374) (72375) (72376) (72377) (72378) (72379) (72380) (72381) (72382) (72383) (72384) (72385) (72386) (72387) (72388) (72389) (72390) (72391) (72392) (72393) (72394) (72395) (72396) (72397) (72398) (72399) (723100) (723101) (723102) (723103) (723104) (723105) (723106) (723107) (723108) (723109) (723110) (723111) (723112) (723113) (723114) (723115) (723116) (723117) (723118) (723119) (723120) (723121) (723122) (723123) (723124) (723125) (723126) (723127) (723128) (723129) (723130) (723131) (723132) (723133) (723134) (723135) (723136) (723137) (723138) (723139) (723140) (723141) (723142) (723143) (723144) (723145) (723146) (723147) (723148) (723149) (723150) (723151) (723152) (723153) (723154) (723155) (723156) (723157) (723158) (723159) (723160) (723161) (723162) (723163) (723164) (723165) (723166) (723167) (723168) (723169) (723170) (723171) (723172) (723173) (723174) (723175) (723176) (723177) (723178) (723179) (723180) (723181) (723182) (723183) (723184) (723185) (723186) (723187) (723188) (723189) (723190) (723191) (723192) (723193) (723194) (723195) (723196) (723197) (723198) (723199) (723200) (723201) (723202) (723203) (723204) (723205) (723206) (723207) (723208) (723209) (723210) (723211) (723212) (723213) (723214) (723215) (723216) (723217) (723218) (723219) (723220) (723221) (723222) (723223) (723224) (723225) (723226) (723227) (723228) (723229) (723230) (723231) (723232) (723233) (723234) (723235) (723236) (723237) (723238) (723239) (723240) (723241) (723242) (723243) (723244) (723245) (723246) (723247) (723248) (723249) (723250) (723251) (723252) (723253) (723254) (723255) (723256) (723257) (723258) (723259) (723260) (723261) (723262) (723263) (723264) (723265) (723266) (723267) (723268) (723269) (723270) (723271) (723272) (723273) (723274) (723275) (723276) (723277) (723278) (723279) (723280) (723281) (723282) (723283) (723284) (723285) (723286) (723287) (723288) (723289) (723290) (723291) (723292) (723293) (723294) (723295) (723296) (723297) (723298) (723299) (723300) (723301) (723302) (723303) (723304) (723305) (723306) (723307) (723308) (723309) (723310) (723311) (723312) (723313) (723314) (723315) (723316) (723317) (723318) (723319) (723320) (723321) (723322) (723323) (723324) (723325) (723326) (723327) (723328) (723329) (723330) (723331) (723332) (723333) (723334) (723335) (723336) (723337) (723338) (723339) (723340) (723341) (723342) (723343) (723344) (723345) (723346) (723347) (723348) (723349) (723350) (723351) (723352) (723353) (723354) (723355) (723356) (723357) (723358) (723359) (723360) (723361) (723362) (723363) (723364) (723365) (723366) (723367) (723368) (723369) (723370) (723371) (723372) (723373) (723374) (723375) (723376) (723377) (723378) (723379) (723380) (723381) (723382) (723383) (723384) (723385) (723386) (723387) (723388) (723389) (723390) (723391) (723392) (723393) (723394) (723395) (723396) (723397) (723398) (723399) (723400) (723401) (723402) (723403) (723404) (723405) (723406) (723407) (723408) (723409) (723410) (723411) (723412) (723413) (723414) (723415) (723416) (723417) (723418) (723419) (723420) (723421) (723422) (723423) (723424) (723425) (723426) (723427) (723428) (723429) (723430) (723431) (723432) (723433) (723434) (723435) (723436) (723437) (723438) (723439) (723440) (723441) (723442) (723443) (723444) (723445) (723446) (723447) (723448) (723449) (723450) (723451) (723452) (723453) (723454) (723455) (723456) (723457) (723458) (723459) (723460) (723461) (723462) (723463) (723464) (723465) (723466) (723467) (723468) (723469) (723470) (723471) (723472) (723473) (723474) (723475) (723476) (723477) (723478) (723479) (723480) (723481) (723482) (723483) (723484) (723485) (723486) (723487) (723488) (723489) (723490) (723491) (723492) (723493) (723494) (723495) (723496) (723497) (723498) (723499) (723500) (723501) (723502) (723503) (723504) (723505) (723506) (723507) (723508) (723509) (723510) (723511) (723512) (723513) (723514) (723515) (723516) (723517) (723518) (723519) (723520) (723521) (723522) (723523) (723524) (723525) (723526) (723527) (723528) (723529) (723530) (723531) (723532) (723533) (723534) (723535) (723536) (723537) (723538) (723539) (723540) (723541) (723542) (723543) (723544) (723545) (723546) (723547) (723548) (723549) (723550) (723551) (723552) (723553) (723554) (723555) (723556) (723557) (723558) (723559) (723560) (723561) (723562) (723563) (723564) (723565) (723566) (723567) (723568) (723569) (723570) (723571) (723572) (723573) (723574) (723575) (723576) (723577) (723578) (723579) (723580) (723581) (723582) (723583) (723584) (723585) (723586) (723587) (723588) (723589) (723590) (723591) (723592) (723593) (723594) (723595) (723596) (723597) (723598) (723599) (723600) (723601) (723602) (723603) (723604) (723605) (723606) (723607) (723608) (723609) (723610) (723611) (723612) (723613) (723614) (723615) (723616) (723617) (723618) (723619) (723620) (723621) (723622) (723623) (723624) (723625) (723626) (723627) (723628) (723629) (723630) (723631) (723632) (723633) (723634) (723635) (723636) (723637) (723638) (723639) (723640) (723641) (723642) (723643) (723644) (723645) (723646) (723647) (723648) (723649) (723650) (723651) (723652) (723653) (723654) (723655) (723656) (723657) (723658) (723659) (723660) (723661) (723662) (723663) (723664) (723665) (723666) (723667) (723668) (723669) (723670) (723671) (723672) (723673) (723674) (723675) (723676) (723677) (723678) (723679) (723680) (723681) (723682) (723683) (723684) (723685) (723686) (723687) (723688) (723689) (723690) (723691) (723692) (723693) (723694) (723695) (723696) (723697) (723698) (723699) (723700) (723701) (723702) (723703) (723704) (723705) (723706) (723707) (723708) (723709) (723710) (723711) (723712) (723713) (723714) (723715) (723716) (723717) (723718) (723719) (723720) (723721) (723722) (723723) (723724) (723725) (723726) (723727) (723728) (723729) (7237230) (7237231) (7237232) (7237233) (7237234) (7237235) (7237236) (7237237) (7237238) (7237239) (72372310) (72372311) (72372312) (72372313) (72372314) (72372315) (72372316) (72372317) (72372318) (72372319) (72372320) (72372321) (72372322) (72372323) (72372324) (72372325) (72372326) (72372327) (72372328) (72372329) (72372330) (72372331) (72372332) (72372333) (72372334) (72372335) (72372336) (72372337) (72372338) (72372339) (72372340) (72372341) (72372342) (72372343) (72372344) (72372345) (72372346) (72372347) (72372348) (72372349) (72372350) (72372351) (72372352) (72372353) (72372354) (72372355) (72372356) (72372357) (72372358) (72372359) (72372360) (72372361) (72372362) (72372363) (72372364) (72372365) (72372366) (72372367) (72372368) (72372369) (72372370) (72372371) (72372372) (72372373) (72372374) (72372375) (72372376) (72372377) (72372378) (72372379) (72372380) (72372381) (72372382) (72372383) (72372384) (72372385) (72372386) (72372387) (72372388) (72372389) (72372390) (72372391) (72372392) (72372393) (72372394) (72372395) (72372396) (72372397) (72372398) (72372399) (723723100) (723723101) (723723102) (723723103) (723723104) (723723105) (723723106) (723723107) (723723108) (723723109) (723723110) (723723111) (723723112) (723723113) (723723114) (723723115) (723723116) (723723117) (723723118) (723723119) (723723120) (723723121) (723723122) (723723123) (723723124) (723723125) (723723126) (723723127) (723723128) (723723129) (723723130) (723723131) (723723132) (723723133) (723723134) (723723135) (723723136) (723723137) (723723138) (723723139) (723723140) (723723141) (723723142) (723723143) (723723144) (723723145) (723723146) (723723147) (723723148) (723723149) (723723150) (723723151) (723723152) (723723153) (723723154) (723723155) (723723156) (723723157) (723723158) (723723159) (723723160) (723723161) (723723162) (723723163) (723723164) (723723165) (723723166) (723723167) (723723168) (723723169) (723723170) (723723171) (723723172) (723723173) (723723174) (723723175) (723723176) (723723177) (723723178) (723723179) (723723180) (723723181) (723723182) (723723183) (723723184) (723723185) (723723186) (723723187) (723723188) (723723189) (723723190) (723723191) (723723192) (723723193) (723723194) (723723195) (723723196) (723723197) (723723198) (723723199) (723723200) (723723201) (723723202) (723723203) (723723204) (723723205) (723723206) (723723207) (723723208) (723723209) (723723210) (723723211) (723723212) (723723213) (723723214) (723723215) (723723216) (723723217) (723723218) (723723219) (723723220) (723723221) (723723222) (723723223) (723723224) (723723225) (723723226) (723723227) (72372322

六輯、八三頁。

- (13) 蘇川前掲論文、四五頁。

(14) 松村禪「『昭和滿蒙史研究』批評」『東洋史研究』11
11—1、九八頁。

(15) プリモフский (ред.) Гомбожааб; Ганга-ын Урусхал,
Москва, 1960 текст, стр. 46—б

(16) Там же. текст. стр. 48—а

(17) カルガイ・カルハルゼ「語が多べるのみ
禁語を出すのは危険だね。」

(18) 稲田龍藏「回転長風」

(19) В.Я.Владимиров; *Общественный Страной Монголии*
Монгольский кочевой феодализм. Ленинград,
1934, стр. 130, 文庫編輯會編訳『蒙古社會制度』出版
社、一九四一、一九七頁。

(20) 國田英弘「カヤ・カホの時代」4「『東洋学報』
四八—四九、一一一頁。

(21) 関井良輔著本 61—V, Altan Tobči Nova. p. 156.

(22) Altan Tobči Nova, II, p.157, Peplingei (ed.) by Yams-
ba; Asararči Neretüi-yin Teiķe, Ulaan baratur, 1960,
sig.; Die Familien- und kirchengeschichtsschreibung der
p. 57

(23) 小糸繁 62—v, Jālārus-un Qurim, 13—v (W. Heis-
sig; Die Familien- und kirchengeschichtsschreibung der
Mongolen I, Wiesbaden, 1959, Facsimilia p. 99) H.P.
Шастина (ред.) *Ulla-pa Tyōku, монгольская летопись*
XVII века, М.Л., 1957, стр. 67

(24) Altan Tobči Nova, II, p. 164, W. Heissig & C.R.
Bawden (ed.) Mongol Borjigid Oboř-un Teiķe,
Wiesbaden, 1957, vol. III p. 2—v

(25) カルガイ 62—v

(26) Asararči Neretüi-yin Teiķe, p. 61, Jālārus-un
Qurim, 15—v Altan Tobči Nova, II p. 164 Ulla-pa Tyō
kei, стр. 73

(27) Rev. A. Mostaert, F.W.Cleaves (ed.) *Bolor Erik, Mongolian chronicle by Rasipungsur*, Cambridge, 1959,
Part III, p. 166

(28) W.Heissig (ed.) Altan Kürdün Mingyan Gegesiitu:
Bölg, eine mongolische chronik von Siregetü guosi
dharma, Kopenhagen 1958, vol. III, p. 22 (カ) AK.
MGB 87號

(29) 関井良輔著本 65—r Altan Tobči Nova, II p. 175
Mongol Borjigid Oboř-un Teiķe, vol. III 6—v,

(30) Čařan Teiķe, 1—v (W. Heissig, Die Familien-
und...., Facsimilia, p. 4)

(31) 小糸繁 65—r, Altan Tobči Nova, II p. 175

- (32) AKMGB vol. VI, 2-v' 但し AKMGB は外ヘルバの年代記たるアサラクチ・ネントイノ・テウケを参照しており、外ヘルバのオトクをすべて知っているので、この記述はやや矛盾している。
- (33) ハロル・ハニクゼリヌカ Učired ルマーリトスカ、ル
れば誰うや Öjived ルムレーヴ。
- (34) *Bolor Erke*, part III, p. 199
- (35) *Asaravči Nereči-yin Teike*, p. 73 *Ulapa Tydžeku*,
стр. 110
- (36) Владимицов, указ. соч., стр. 136. 部語、111〇頁
- (37) ウルガ本 66-r
- (38) 萩原淳平「『ヤノ・カン』の研究」『明代蒙古史研究』、一九六二、一九五頁。
- (39) 和田前掲書 四八一〇頁。
- (40) ウルガ本 63-r
- (41) ウルガ本 64-r, *Erzemi-yin Tobčiyya*, p. 422
- (42) 和田前掲書 1111~1111頁。
- (43) ウルガ本 65-r
- (44) ウルガ本 66-r
- (45) *Bolor Erke*, part III, p. 199 田中前掲論文、八二一頁。
- (46) ウルガ本、58-v *Altan Tobči Novu*, II, p. 158
- (47) ウルガ本、63-v, 65-v ジュ・ルムガイ・ダルバンになつたといふ蒙古源流の記録は大げなや、或いはアルタン・ムトホに記されたよう简单なるダルバンの号を得ただけであらん。A.T. Nova. II. p. 174
- (48) 更に後にはペーロン部のシマグバイとオジイヌル船のシマハイ（糸花）の活躍が重ねられるが、この記の事情はまだ別な理由によると思われる。
- (49) *Ulapa Tydžeku*, стр. 107~8 ルの話はかどる佐藤長氏が「ダヤンカーンにおける史実と伝承」(『史林』四八一四) の中で断続して紹介されている。
- (50) 原文は *sinusum* である、シャステル出さるれを otvazhnyi (勇敢なる) と記してある。*(Ulapa Tydžeku*, стр. 162), *sinusum* とは確かにその意味があるが、この場合とは問題である。エリハドナシタクムルシ出はるの部分は、「ホヘクのサハカヌ・サハト」ルヒト 128。(*Xakasch* Tyryk, Уланчагтар, 1963, 25-тэр) もた松本氏も同様である。(前掲批評、九八頁) 元朝秘史によれば一千の巴阿喇 (Barin) が林の民を併せて万户となつた時、その中に赤那野 (Činos) が記載されている。(那珂通世訳『成吉思汗実錄』一九五頁) シラ・ムカーシに記載され Činos もこれ何いかのつながりがあると思われ、エリハドナシタクムル

シ、森川氏の都城をもとめ、かじらぬ。

- (51) *Ulapa Tyôjaku*, ctp. 109~10
- (52) Tam JE. ctp. 162
- (53) *Asarayči Neretü-jin Teike*, p. 72
- (54) Galdan; *Erdeni-yin Erike*, p. 83
- (55) 森川前掲論文、図表～八頁。
- (56) *Asarayči Neretü-jin Teike*, p. 73, *Ulapa Tyôjaku*, ctp. 110
- (57) *Akhan Tobči Nova*, II, p. 189, *Ganra-ñuu Ury-çkal*, текст, ctp. 46-a, *Ulapa Tyôjaku*, ctp. 85
- (58) *Mongol Borjigid Obor-un Teike*, vol. III, 5~v
- (59) 但し、この場合、スカル・ヘルンがシヤホイエ由来である
たのばやの子孫、ヤンジンの名聲から来たと思われる。然い
くば尾部の由來であることを考へる。
- (60) ウルガ本 69-r
- (61) 護羅夫「元初におかる『蒙古赤船隊』とウラト」『蒙古
亞細亞學報』III, 111〇頁。
- (62) 節内互『蒙古史研究』1911〇 1111七頁。
- (63) 岩村忍『モンゴル社會經濟史の研究』京都, 1111七頁。
- (64) 護前掲論文、1111~11頁。
- (65) 同論文、一六一頁。
- (66) 『成吉思汗實錄』11九二〇頁。
- (67) 護前掲論文、157~9頁。
- (68) 同論文、一八一頁。
- (69) 同論文、171~111頁。
- (70) 和田前掲書、115~6頁。
- (71) 回書、114~5頁。
- (72) 國初群雄事略、卷1
- (73) 和田前掲書、五111頁。
- (74) 護前掲論文、161頁。護氏はその他オルグヌードも
あざられてゐるが、これが後にハルハの一部族に入つて、
たゞとは後述の通りである。
- (75) 回論文、11111頁。
- (76) 同論文、111〇111頁、注大正、11〇四頁、注八一。
- (77) イキレスはハルハの諸オトクには名前が見えないが、
シカクレ和吉の娘の一人が、イクレス、IkreesへIkrees 身出
身のホモモヤ・ゾベイ Qočoi beiži ドホロリムルホモヤ
ズ (Ulapa Tyôjaku, ctp. 121) かうしてのイキレス部の残
りが、ハルハの小集団を形成していたことが考え
られる。
- (78) ウルガ本 67-v
- (79) *Ulapa Tyôjaku*, ctp. 110
- (80) Tam JE. ctp. 114
- (81) Tam JE. ctp. 117

(82) 蒙古回部王公表伝、卷第一、略爾路扎薩克圖汗部總領
也。

(83) *Asarayči Nereččin Teike*, p. 74, *IIlara Tyōjiku*,
стр. 113

(84) 矢野仁一『近代蒙古史研究』京都、一九二二年、一〇〇頁
～一九頁。岡田「ウバシ・ポンタイシ伝考証」一一頁。

(85) 蒙古回部王公表伝、卷四五、略爾路王讃圖汗部總領。

(86) 同書、卷五三、略爾路車臣汗部總領。

(87) *IIlara Tyōjiku*, стр. 114. ジのサブダタイはオイケト
ヘの戦いや若くして殺されてしまう。(岡田「ウバシ・ポン
タイシ伝考証」一一～一九頁) しかしサブダタイの系統は
断たれずに続いており、從つてヨリエケイが力を得たの
は、サブダタイの死だけではなく、その背後にジャライル
の力があったためと考える。

(88) *IIlara Tyōjiku*, стр. 112

(89) 例えどもハヤハシの第六子ダルタンの二十一世、ホウ
ク・アケルハシハムハ・ダーバン・ペートルはそれがジヤ
ハイル出身の女を妃の一人としている。(IIlara Tyōjiku,
стр. 117～8)

(90) ハジの記録では、Baddeley の “Russia,
Mongolia, China” の I 卷に The First Russian
Mission to China (vol. II. pp. 65～86) の概要紹介がある

。最近では *Materials по Истории Русско-
Монгольских Отношений 1607～1636*, М., 1958

の中文版(No. 34)。J. R. M. S.
J. R. H. Ф. Демидова и В. С. Масниковの著集の *Первые
Русские Дипломаты в Китае*, М., 1966 が注目される
が、この書籍は「ロシアにキタイ帝国
 государства, и Лобинскому, и иным государствам, жилим
и кочевнем, и улусам, и великой Оби, и рекам и дорогам
アルハの題で載せられた。アルハは原本が 110、原文
書の写真、更には注がりのふれい文、最も充実して
る。特に最近出版された書 *Русско-Китайские отно-
шение в XVII веке*, том I, М., 1969 が注目される
がお値段がかかる。(No. 26) これがやぐるに基礎となる
やうだ。

(91) *Первые Русские Дипломаты в Китае*, стр. 42,
вариант I.

(92) ジの記録では、この事件は 1615 年である。シャスク
ト出の *Первые сношения Монгольского государства
с Атами-ханами Западной Монголии*, М., 1950
アルハ本の中央諸州へ解説がある。この書籍は
未開拓地。

(93) *Asarayči*, p. 73 *IIlara Tyōjiku*, стр. 110

- (94) *Asarayči*, p. 76 *Шара Түдешу*, стр. 85
 (95) *Asarayči*, p. 73 *Шара Түдешу*, стр. 110 だ
Шара Түдешу シュラ・スル Enjigen otoγ いじγ しる
Asarayči エイジエン エジヘグ カド・スル。
- (96) *Asarayči*, p. 76, *Шара Түдешу*, стр. 113
 (97) *Asarayči*, p. 73 *Шара Түдешу*, стр. 110
 (98) *Asarayči*, p. 84 *Шара Түдешу*, стр. 115
 (99) *Asarayči*, p. 73 *Шара Түдешу*, стр. 118
 (100) *Asarayči*, p. 74

(101) 『成吉思汗東遷』一七八、三回画 ウルガ本 26-1

(102) 『圓田前掲譜文』大販。

(103) 張穆『蒙古遊牧記』卷一〇、路爾路西路扎薩克圖片部。矢野前掲書一九頁。

(104) 興安嶺東側の扎齊特 (Jalavid) は和田氏の遠くのねじ
 ジュヌヨウジンカヒテのシャライル族の流れをくむものと考へ
 されるが (前掲書一六頁)、その支配者はハサルの後
 齋となりており (蒙古回部王公表記、卷11)、地理的な
 点も含めい、ヘルムに属してしたシャライルと直接的な関
 係は無いと思われる。

[註記]
 本稿の題題は、Д. Гонторов «Халх Тобоои I, халх
 монголчуудын өөрөг дээрээс ба халхын хааны улс
 (VIII-XVII зуун), Уланбаатар, 1970 (Г.ハ.トボーの蒙古人
 ハルク・ヤンタル人の祖先とヘルハ汗國(八~十七世紀)』)
 を手に入れた。書名からも知られるように、一部本稿と同様
 の問題を論じており、おた参考にすぐれると見られるが、本
 稿には全く利用出来なかつた。